

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒190-0013
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2013年(平成25年)7月16日 火曜日

無料

第14号

毎月発行

創刊2013年(平成25年)7月16日 火曜日

復興は被災者主導で実現できるのか？それとも……
住民合意に基づく被災地復興計画は出来るか？
住民合意不成立で行政による強制執行受入か？
あるいは被災地復興をあきらめ被災地と決別か？
震災から2年過ぎたいま住民の決断が求められる

**ドキュメンタリーTVを見て
被災地の実状を考える**

宮城県名取市閑上(ゆりあげ)地区
震災直前約5600名、死者約800名、
生き残った住民の決断はどうなるか？

被災地住民合意形成 の生々しい現状

先月二八日、NHKスペース番組として「津波にのまれた町・再起へ密着800日」副題に「あせりと怒号の激論 住民合意で迷走」というドキュメンタリーTV番組が放映された。八〇〇日間に及ぶ密着の対象となったのは、宮城県名取市閑上(ゆりあげ)地区を含む名取市の市長、家族を亡くしてまだ遺体が見つかっていない遺族の男性、それと「ゆりあげ港朝市プロジェクト」のリーダーの三名である。

その三人を軸にして、行政の側、家族を失った遺族の側、まちの再生を願う民間プロジェクトの側の動き、またそれらを含む閑上地区の八〇〇日間の動きのなかで揺れ動く住民の動向・思いを捉えた番組であった。

三人の動きと 住民動向

震災から二年二ヶ月経過後に展開するこの地区の状況は、この三名の動きのなかから自然に浮かび上がってくる番組の構成である。まずは、現状の硬直する行政システムのなかで何とか元通りに地域再生を推進しようとするあまり、住民意思を強引にまとめ上げ、その「意志」を踏まえた復興計画を推進しようとした市長と行政がある。市長から何度か出てくる発言のな

かで印象に残る言葉がある。「いずれまちが消滅するよな復興プランを作るなら最初から止めた方がよい」。復興計画の決め打ちである。冷静さを装う表情からは、なぜこれを住民は理解してくれないのかといういらだちが見え隠れする。一方で、強引に住民の意志をでっち上げられたと反発する住民。その対立の構図は一貫して変わらない。どちらも一歩も退かない。

遺体を発見できずにいる遺族は、復興計画により土盛りで遺体が発見できなくなることで、土盛り工事の過程で、遺体が埋まっているかもしれない土地を多くの人間に踏まれることに耐えられないと言う。遺族にすれば当然の気持ちだ。

朝市プロジェクトリーダーは、このままでは閑上のまちは消滅するという危機感から、何とか住民合意形成に努力しようとする。しかし、時間経過とともにバラバラになってしまった住民の気持ちはなかなかひとつの方向にまとまってい

き出さず、二年二ヶ月という時間の経過とともに、なかなかまとまらない復興計画に業を煮やして、この土地を離れようとする住民がどんどん増えていく。その割合は、最初から震災の記憶から離れてしまいたいという移住希望住民と合わせて約1/3にまで上昇している。それとほぼ拮抗するのが、元の土地に戻りたいという住民。しかし、そこにもいろいろ障害がある。国からの助成獲得にはある程度の人数が必要であるのだから。震災をくぐり抜けた住民は五千名弱だったが、再三に亘る住民意向ヒアリングを経ての賛意の数は三千名をも下回り、千五百名近くまで激減していく。

さらには様相を複雑にしているのは、元の土地にはなく、津波が襲ったところから被災地の隣接地まで撤退した地点に転居したいという住民。これが徐々に増えてきている。この案どおりに復興を進めれば、もとのまちは消滅する。

さらに事態を混乱に引きずり込んでいくのが、あちこちに出来上がったたくざんの住民グループ。一説では数十とも言われるが、いったいどれくらいのグループがあるのか誰も把握していないようだ。住民合意形成が必要と動

き出した朝市プロジェクトの前述のリーダーだったが、番組では、議論の入り口で頓挫してしまっていた。つまり、リーダーはどれだけのグループがどんな考え方をしているのか分からないのに、いきなり集まったグループの合意形成を図るのは強引過ぎると思え、意見表明の場をとりあえず設けようという意図であったが、いくつかのグループからは時間が差し迫っている中で、そんな悠長なことをしている場合ではないと強硬な意見が出る。

結果、第二回目の会合では、半数以下のグループ参加となってしまう。ひとつのテーブルにつくのさえも困難な状況である。

遺族はボランティアと砂浜の遺骨探索へ、市長は再度計画説明会へ

遺体を捜し続ける遺族は、全国から集まったボランティアとともに、砂浜の一斉探索を行う。すると多くの骨が見つかる。多くは動物の骨だろうが、人間の遺骨があるかもしれない。何かせずにはいられない遺族。一方、市長は再度の復興計画の説明会を開催。基本路線は何も変えない。その変えないことに、一部住民から強引な推進であり、民意はどこにあるとの怒号が会場内に響く。

組の終盤でつぶやかれた「このまままちが消えるか、あるいは行政による強制執行しかない」との言葉が先行きを暗示しているように感じられた。

ハード化した行政システムから出てくる助成金制度、その対象となるそれぞれの被災地域の復興計画も柔軟性を欠くものになるのは仕方がない。だからこそ、復興特区構想で、行政の硬直システムを棚上げする必要はない。かき消されてしまった。復興片は出来たが、どれだけきめ細かく現地事情に対応できるだろうか。一方、復興予算はその硬直した枠組みのなかにしかない。首長とすれば、それを獲得しようとするのは当然であり、それを一概に責めることはできない。

住民合意形成不透明問題

また、住民合意形成問題は、首長の強引な運営にのみ起因するものだろうか。効果的な住民合意形成プロセスを住民自ら実現するた

めの知恵やノウハウが不足しているのではないかと感じられてならない。つまり、人間一〇〇人いれば一〇〇通りの考え方があがるが、それぞれがその一〇〇通りの考え方を押し通せば集約化はできない。どうしても前進させなければならぬ課題であれば、メンバーの合意が出来ないときは、誰かが強引に決めるしかない。かつてはそれが専制君主であったり、独裁者であったりした。よく日本の自治、民主主義は国民が勝ち取ったものではないと言われる。いままさにこの事態が証左ではないか。住民が自分で決められない。バラバラになつて合意形成が遅れば、誰かが決断するのだ。この分かれ道に立っていることが出来ない。損をするのは結局住民である。合意形成に至るまでには妥協もあり、意見を通す部分もあり、話し合いもある。それが政治の基本であり、自治の精神である。そ



閑上(ゆりあげ)朝市風景

おいしい復興支援 三陸の海産物とお酒のイベント 第二回 三陸酒海鮮会 於：焚火家渋谷店 6/29



天然のホヤ

今年四月の第一回開催に続き、第二回目を六月二十九日(土)に、前回同様、渋谷の焚火家で開催した。この会は、すでに何度かご紹介したように、三陸の海産物を素材にしておいしい料理にしていきたい、同じ

じく三陸の日本酒とともにいただきながら、三陸の復興を支援してもらおう『おいしい復興支援』というイベントである。第一回の料理は比較的オーソドックスな素材を中心に選定した。しかし、二



宮城のお酒

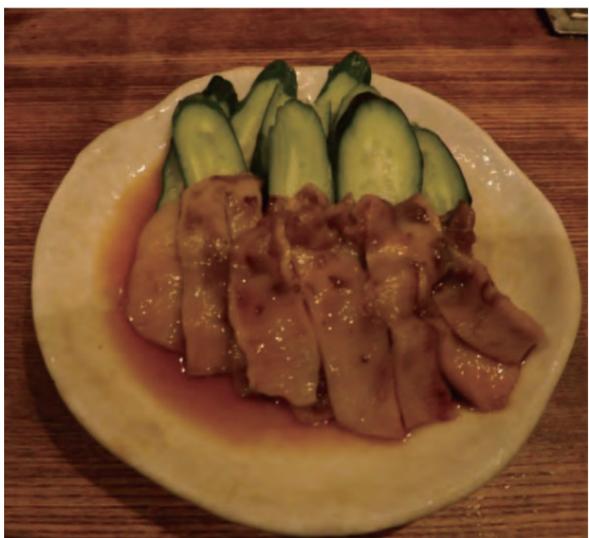
回目は一回目と同じメニューというわけにはいかない。飽きられないように思い切つて変えてみようと考え、この二ヶ月間、素材と日本酒を探してきた。

「ホヤ」は貝ではなく原索動物の一種で、漢字による表記では「海鞘」、古くには「老海鼠」、「富也」、「保夜」などの表記も見られる。ホヤの名は、「ランブシェード」に当たる火屋(ほや)にかたちが似ているから、または「ヤドリギ(ほや)」にそのかたちが似ているからと言われ、またマボヤはその形状から「海のパイナップル」と呼ばれることもある。またホヤは日本、韓国、フランスやチリなどで食材として用いられてい

料理のなかでは、何といつても「天然ホヤ」である(左上写真参照)。人によっては大変な好き嫌いがあるこの素材を思い切つて提供してみた。反応がどうなのか心配したが、新鮮な素材で、しかも天然ものは大好評で一安心。関東以南では知らない人も多いのであらためてご紹介しよう。

◇

る。日本では主にマボヤ科のマボヤとアカボヤが食用にされている。古くからホヤの食用が広く行われ多く流通するのは主に東北地方沿岸部であり、水揚げ量の多い石巻漁港がある宮城県では酒の肴として一般的である。また北海道でも一般的に食用の流通がある。多いのはマボヤであり、アカボヤの食用流通は北海道などであるが少ない。東京圏で食用が広まり多く流通するようになったのは近年である。中部地方以西・西日本各地では、今なおごく少ない。天然物と養殖により供給されている。鮮度落ちが早く、新鮮なものは臭わないが、鮮度が落ちると金属臭のような独特の臭いがあり、好き嫌いが分かれる。この臭いは鮮度が落ちると特に強くなる。鮮度の管理が難しい。独特の風味が酒の肴として好まれ、刺身、酢の物、焼き物、フライとして調理され、塩辛、干物に加工される。(ウイキペディア)



ホヤの酢の物

その他の食材とお酒

ホヤ以外には、宮城県石巻市の「木の屋石巻水産」から、クジラの刺身とベークン、また石巻市雄勝にある「OHガッツ」という合同会社から、牡蠣を提供していただいた。

お酒の方は、筆者の故郷のすぐ近くの酒蔵から「黄金澤」を新たに加えた。今回は酒豪ぞろいで、日



鯨ステーキ



鯨の刺身

本酒はあつという間になくなり、「飲み放題」の看板が大ピンチとなった。友人からの差し入れの「日高見焼酎」がなかったらブライングの嵐になるところだった。

次回(三回目)は、八月三十一日(土)の開催予定である。ぜひふるつてご参加いただきたい。素材もお酒も新たな趣向を凝らしていきたいと考えている。そうすることで三陸の特産物の裾野の広がりと、おいしいお酒も実感してもらおうと



焼き牡蠣



牡蠣なべ

考えている。とはいえ、このイベント一・二回では、漁業生産者を支援したと言える規模にはほど遠い。こうした会を重ねることが必要である。そうすることで、被災生産者に目に見える貢献となる

までにしたい。最後に、参加者の多くから、せつかくの良いいイベントなのでもっと多くのの人に知ってもらおうべきとの暖かい言葉があった。まことにありがたい。あらためて御礼申し上げる。

銀座・復興バー

期間限定の復興支援イベント 惜しまれつつ7/5で終了 今後はどうなる？再開？

銀座・復興バー訪問

宮城県石巻市関係者が運営に参加している「銀座・復興バー」が今年五月三十一日にオープンしたことは知っていた。期間限定で最終日は六月二十九日。当新聞主催の『三陸酒海鮮会』の活



最終日、開店前から並ぶお客

動とも一部趣旨が似ており、宮城・石巻に関連するという共通点もあり、行くところと思っている間に最終日が近づいた。幸い一週間の延長が発表された。その延長の最終日の七月五日にやっとおじゃますることができた。

日替わりマスター
その石巻・復興バーは、天井まで浸水した店を数人の仲間たちがDIYで改装し、二〇一一年七月にオープンしたという。そのバーは一〇人も座れば一杯にな



開店した途端すぐ満席



運営者の茂手木氏(右)と常連客

このバーは、石巻を中心とした被災地の野菜や海産物、お酒類を提供しつつ、被災地支援のボランティアたちの交流と情報交換の場として活用されてきた。ユニークなのは、毎日、日替わりの「日マスター」の思い通りに店を運営するというところにあった。店のオープンと同時にその一日店長を募集したところすぐに予約でいっぱいになったという。

石巻・復興バー

この銀座・復興バーの原型はもともと石巻にあった。そこに入りにしていた東京のボランティアのすずめもあって、銀座に出店することになったという。

また、ISHINOMAKI 2.0は常にオープンな集団で、石巻の内外の人々を巻き込みながら、すべての人がまちづくりの主役となるような仕組みをつくりだそうとしているという。

石巻2.0とは

石巻・復興バー運営は、ISHINOMAKI 2.0という一般社団法人が行っており、東日本大震災を経験した石巻というまちを、震災前の状況に戻すのではなく、新しいまちへとバージョンアップさせるために二〇一一年六月に設立した。メンバーには地元の若い店主やNPO職員をはじめ、建築家、まちづくり研究者、広告クリエイター、Webディレクター、学生など様々な職能を持つ専門家が集まっているとのことである。

今後の連携

銀座・復興バーは七月五日で惜しまれつつ終わったが、このまま復活せず、何もないとは考えにくい。必ずや何らかの形で復活・再開すると確信する。

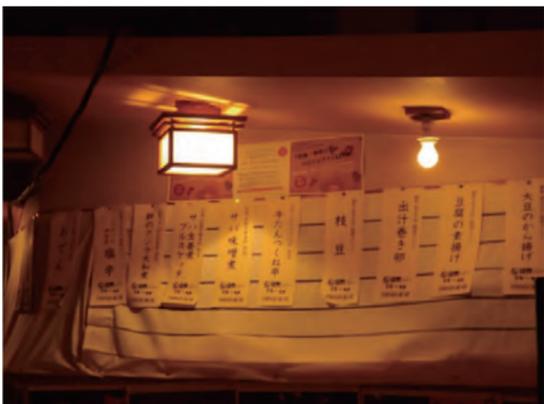
当新聞としては、この活動と何らかのコラボが出来ると思っているし、これからは接触を続けて行こうと考えている。それは東京圏でのコラボもあれば石巻でのコラボもあるはずである。

それはともかく、これまでの活動と今後の活動に当新聞からもメールを送りつつ、「お疲れさまでした」と労苦をねぎらいたい。

また、石巻のバージョンアップが、日本のバージョンアップのモデルになることを目指しているということだ。



運営者の松村氏



メニューの一部

神輿の修復と祭の再開

石巻市雄勝桑浜 白銀神社

若者3人を中心としたボランティアの尽力で実現



修復神輿を神社に奉納するため山道に登る

七月一日、(公社)全日本郷土芸能協会事務所において、第一八回「ふるさとの祭りや芸能の映像トークライブ&ネット生放送番組」『郷土芸能STORE AMビデオライブ』が開催された。

今回のテーマは『ありがとうもう一度雄勝へ 海、震災、祭り、神輿が繋いだ雄勝との由縁』であった。この祭りで使われた神輿の修復で

「アシタスキ」というグループの宮田宣也氏、小林野渉氏、後藤大輝氏の三人の若者がプレゼンター。活動報告の内容は、今年四月二十八日に開催された宮城県石巻市雄勝町桑浜羽坂地区での春季例大祭実行にあたってのこのグループの祭りへ参加と実際の例大祭の状況報告であった。

なかでも興味をひいたのは、彼らが地元の方々どのようにに関わり、どのようにに受け入れられたかであった。浜の人々は、案外外部人間を容易に受け入れるが、そこから実際に溶け込むまでには大変な時間と信頼関係が必要だと言われているので、彼らはどうだったかに非常に興味をそそられた。



神社から祭会場に移動する神輿

質問タイムでそのあたりの事情について本音が語られた。予想通り、溶け込む一歩目は良いが、二歩目はなかなかむずかしいという。毎年この祭りに参加するとか、さまざまな接触の機会を経て、ようやく信頼関係が作られていくので、今後の彼らの活動に期待したい。とはいえ、この地区の祭りは彼らの尽力がなければ開催は難しかったのも事実であり、かれらの努力を賞賛したい。

勝者の歴史、敗者の歴史

山本覚馬という人

NHKで東北を舞台にしたドラマが放映されている。一つは岩手県久慈市をモデルにした「北三陸市」が舞台の連続テレビ小説「あまちゃん」、もう一つは福島県会津地域が舞台の大河ドラマ「八重の桜」である。「八重の桜」は毎週見ているが、私がとりわけ注目したのは、「八重の桜」の主人公、八重の兄、山本覚馬という人物である。同じ東北にいながらまったくの不勉強で、このような人物が会津にいたことをこの大河ドラマを見るまで知らないでいた。

この山本覚馬、遡れば山本勘助に連なり、代々兵法指南として会津藩に仕えてきた山本家の六代目当主、砲術指南役の権八の長男として誕生した。多くの人材を輩出した会津藩の藩校日新館で頭角を表し、二二歳で佐久間象山の塾に入り、吉田松陰や勝海舟や橋本左

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagmas/>



大友浩平氏

Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.otomo>

内と共に学ぶ一方、弓馬槍刀の師伝を得て藩主から賞を受けたという、いわば文武両道に秀でた人物だった。その後も蘭書を読み、洋式砲術を学び、会津に戻って日新館の教授に就任、蘭学所を開設、一方で藩の軍制改革も訴えて一時は禁足処分となるものの、一年の後に軍事取調役兼大砲頭取に抜擢された。

その後、京都守護職に就任した藩主松平容保に従って京上りして黒谷本陣で西洋式軍隊の訓練に当たる一方で、洋学所を主宰して会津藩士のみならず在京の諸藩士に洋学の講義も行ったという。

禁門の変では砲兵隊を率いて参戦して戦果を挙げ、その勲功で公用人(藩主が幕府の要職にあるときに対幕府・諸藩と情報交換などを行う外交専門の用人)に任ぜられた。これによって覚馬は、幕府や諸藩の有力人物と交わる機会が増え、その活動範囲を広げるが、

眼病を患い、ほとんど失明同然の状態になってしまった。その後、長崎に行つて会津藩の新式銃の購入の交渉を行っているが、この時に長崎にいた外国人と多く交わつたようである。

獄中でまとめられた新国家への建白書

大河ドラマでは、都で王政復古が宣言された後に始まった「鳥羽・伏見の戦い」の折、山本覚馬は松平容保に停戦を願ひ出るべく動き出すが、その途上薩摩兵に捕らえられ投獄されてしま

う。牢獄の中で、視力を失い、会津救済の願ひも取り次げられず、失意の中にいた覚馬は、「ただ身一つで立ち上がればよい……立ち上がれ！」と、生前の吉田松陰の声を聞く。「立ち上がれ……。そうが……。まだある！俺に出来る事が、まだ一つだけ！」

そう言つて覚馬は、獄中での新国家への意見書を書き始めるのである。視力を失っていたので、同じ牢に投獄された門下生に口述筆記でまとめさせる。途中、牢番に嫌がらせで何度も破り捨てられるが、覚馬は自分の胸を叩いて、「言葉はみんな、ここにある！ここにありもんは、誰にも奪えねえ！」

と言ひ、また最初から書き始めさせるのである。「管見」で言わんとしていること

こうして牢獄の中で出来上がった山本覚馬の新国家への意見書が「管見」(管見とは「細い管を通して見る」という意味で、自分の知識・見解・意見を視野の狭いものとしてへりくだつていう語)である。ただ、現存する複数の資料のうち、内容的により完全なものとして資料には「山本覚馬建白」との題が付けられている。

自身と会津藩を取り巻く逆境の中でまとめられた「管見」だが、その内容がまたすごい。学校教育の中で学んだ歴史だけが頭のなかにあると、「新政府軍」開明派、「旧幕府軍」守旧派」という二項対立の中だけで両者を捉えがちであるが、「守旧派」の代表と目

されがちな会津にこのような建白書をまとめた人物がいたことに驚きを禁じ得ないのである。その中には極めて多様な項目が取り上げられており、かつそれぞれの項目について詳細に覚馬の見解が記されている。私なりにまとめると、概ね以下のようになる(山本覚馬建白の内容による)。

政権：憲法の制定、三権分立
議事院：二院制の議院の設置
学校：人材育成のための学校の整備
変制：制度の変革、新聞紙の制作
撰吏：能力のある人材の

登用
国体：石高に対する課税、兵制改革、国民の均等な負担
建國術：商業活動を基軸とした資本の増大と産業の活性化
製鉄法：溶鉱炉を使う製鉄所の設置
貨幣：適正な品位の貨幣の鑄造、藩札等私的通貨の禁止
衣食：西洋風の暖衣肉食の励行
教育：女子に対する高等教育
平均法：長子相続から平等な相続への遺産相続の法制化
釀酒法：米不足を解消するための米醸造の禁止、麦、葡萄、芋等を使った醸造

条約：瀬戸内海を航行する際の規則の策定
軍艦国律：国による軍艦の建造
港制：輸送コスト削減のための港からの水路の設置
救民：政治の責任としての感染症対策
髪制：鬚の習慣の廃止
変仏法：僧職者への官許制の導入
商律：貿易時の海難事故に備えた船舶保険、貨物保険、生命保険の創設
時法：二四時間制の導入
暦法：太陽暦の導入、元号の廃止
官医：西洋医学に通じた医師の育成
小引：確固たる国是の策定と富国強兵の達成
このように、国体に関する

ことから髪型に関することまで、実に幅広く新国家像について提言している。憲法の制定や三権分立、二院制の議院の設置など、外国人も含め、様々な人物と交流していた成果がこの「管見」には現れている。この時代に女子に対する高等教育の必要性を指摘するのは、あるいは八重という男顔負けに活動する妹の存在が念頭にあったかもしれない。

やはり新政府に大きな影響を与えたとされる坂本龍馬の「船中八策」よりもはるかに網羅的かつ具体的である。事実、この「管見」を目にした西郷隆盛や岩倉具視らは、その内容に驚嘆したと伝えられている。

勝者の歴史、敗者の歴史

ところで、もちろん私の不勉強もあるのだけれど、普通に考えてこれほどの人物がそれほど知られていないのは、山本覚馬が会津の人物であつたことと無関係ではないのではないだろうか、と思わざるを得ない。我々が知る歴史は、その時々勝者によって記述される。そこに記されるのは勝者の言い分であり、敗者の言い分が残されることは少ない。また、勝者にとつて都合のよい事実が大きく取り上げられ、都合の悪い事実は矮小化して取り上げられるか、事実そのものが改変されて取り上げられる

か、全く取り上げられないかのいずれかの経過を辿ることが多い。幕末の歴史について我々が見聞きする情報も、新政府側から見たものであることが多い。その中には、旧幕府側の事情や動向は、あまり語れない。山本覚馬の例も、そうした事情で人口に膾炙することがこれまでに少なかったのではないだろうか。このようにうな気がするのである。

藤原泰衡に見る敗者の描かれ方

敗者が必要以上に矮小化されて記録される例として私が真っ先に思い出すのは、奥州藤原氏四代目の藤原泰衡についてである。この藤原泰衡、歴史上の人物の中でも人気の高い源義経を討つた人物として、そして何と言つても平泉の百年に終焉をもちた人物として、すこぶる評判が悪い。加えて、源頼朝が東北に攻め入った時に一戦もせず逃げ回り、挙句の果てに家臣に裏切られて殺害されるという最期を遂げたという

ことも、評判の悪さに拍車をかけている。しかし、よく考えてみると、そうした悪い評判の原因となつている情報のうちかなりの部分は、実は勝者である鎌倉幕府の記録である「吾妻鏡」によるところが大きい。文治五年奥州合戦で泰衡について書かれた箇所を見ると、

「慌てふためいて逃げ出した」、「急いでいて館にも立ち寄れなかつた」、「命惜しみのためにネズミのように隠れ、鳥のヒナのようには逃げた」などと表現されている。

まるでその場で見ていたような書きぶりであるが、源氏の軍は泰衡が北方に転じたこの時まだ平泉へ北上する途上だったわけであるから、本当にそうだったのか確たる証拠があるわけではない。そしてまた、泰衡の行動の意図が本当に逃げ回ることにあつたのかどうかも分からない。吾妻鏡には、少なくとも鎌倉方はそのように見ていた、ということが書かれているに過ぎない。にも関わらず、泰衡の評判はこの吾妻鏡によってほぼ決定づけられてしまつていふという現実があるのである。

「敗れても、滅びても……まだ残るものはある！」さて、大河ドラマ「八重の桜」に戻ると、会津城下に戦火が迫る中、京都では覚馬が新国家への意見書「管見」を書き上げた。その時に覚馬は言う。「敗れても、滅びても……まだ残るものはある！」歴史上の山本覚馬が同様のことを言つたかどうか定かではないが、大変印象に残る言葉である。考えてみれば、東北の歴史はいつもそうだったのではないだろうか。阿弖流為以来(実はさらに遡るが)戊辰戦争に至るまで、東北は時の権力者と戦ひ、敗れ、滅びたが、それでも何かを確かに残してきた。

阿弖流為は理不尽なものに抵抗する蝦夷の精神を、奥州藤原氏は今なお世界に誇れる平和の理念と、この世が浄土であることを示した文化遺産を、そして戊辰戦争で敗れた奥羽越前藩同盟は、東北が一つになれる可能性を、そうしたものを後世の東北人に残してくれた。勝者の歴史には残らなくても、東北には、先人たちが自ら敗れ、滅びても残したものが、間違いなく残つている。山本覚馬も歴史の教科書には登場しないが、獄中で理想の国家像を思い描いて残した彼の「管見」は残っている。そしてそれは、今も東北にいる我々に何かを言わんとしているかのようである。最後の「小引」の中にこのような覚馬の言葉がある。「国家騒擾の際に乘ずれば変制も仕易しやすきものにて、追々文明の御政体御施行なるべく」国家的騒擾の機会に乗れば体制変更もしやすく、追つて先進的な政体も施行されるだろう、と言っている。今回の東日本大震災も「国家騒擾」と捉えれば、まさに今やらなければならぬことは「文明の御政体」を創り上げることだと言え

るのではないだろうか。

連載
むかしばなし

芭蕉のむかしばなし

第二話
あの丘は
最後に
しましょう

「しかし芭蕉さん、こんなに沢山の人が巻き込まれてしまつて、お困りではないですか。」

客車のドアから昇降梯子で草原に降り立ちながら、宮澤賢治は言った。

「お父さん、宮澤さんで。若は一緒に窓から顔を出す父を見上げた。」

「そつだ、きつとその人だ。」

喜善が確信を持って応える。今純三は画板と鉛筆を取り、眼下の情景と人の姿をスケッチし始めた。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出だし演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

芭蕉と呼ばれた旅の僧風の男が言った。「時間がないので、皆様方にも手伝つて頂きまして。かなり歩かねばなりません。」

宮澤賢治が持っていたトランクを草の波打つ地面に置き開くと、西日の光が射して何か強く反射する物がその中にあるのがわかった。

「ありがとう、宮澤殿。」僧はそれを見て、深く頭を下げる。状況が飲み込めず、各車両不安と混乱のざわめきが増してくる。前方、機関車から機関士一人を伴い、車掌が歩いてきた。

「これはどういう状況か。説明できますか。」車掌が若いなりに厳しい口調で質す。

「はい、真に申し訳ありません。もう日が暮れます故、明朝改めてと言いたいが、やはり一通りお聞き届けの上、一晩心の準備を整えて頂いた方がよいでしょう。」

「おお、いかに。と言つて突然、喜善が窓から頭を引つ込め、娘の肩を叩くと、「事情をよく聞いてこなくでは。ここで待つておいで。」と言つて、やけに張りきつ

て席を離れ、客車を降りていった。とにかく聞きたがりの父なんです、と半ば呆れる娘の顔を見て今純三は微笑み、画板のスケッチに草原へ駆け出す背の高い和服姿の男を描き加える。しかしそんな喜善の姿を見て、各車両から同じように話を聞こうと老若男女が次々と降り立って、僧と車掌らの下へ集まり、たちまち人だかりとなつたものだから、わいはあ、と純三は画板に筆を叩きつけてしまった。

芭蕉という僧は低音の悪声の持ち主で、周りを囲む人々のざわめきもあつてかその言葉は若の耳までほとんど届いてこない。父は勿論、人だかりの中心の方で僧と車掌のやり取りを熱心に聞いているが、時折何やら首を横に向けている。どうやら人の輪の外でしゃがみ、トランクの中の光る物を一つ一つ小さな麻袋に入れていく宮澤賢治の方も気になつていくようだ。

ところで客車の屋根から落ちた無賃乗車の少年だが、人だかりに加わるでもなく、落ち着きなく草原を歩き回つていた。

「私は佐々木若と申します。実は父が宮澤さんとお会いしたいくせに、恥ずかしがつて仕方ないので、私が参りました。」

と語り、賢治は是非もない様子で立ち上がり、少女に導かれるまま歩き出したが、誰もが呆然として見送るばかりだつた。客車に電灯がつき、二人は乗客に触れ回る車掌とすれ違ふ。

少年の名は、祝魚といつた。十和田から汽車の屋根に飛び乗つた修行中の狩猟師である事は判つたが、ただひたすらにオミキを助けねば、オミキを、とうわ言のように繰り返すばかりで、若も純三もお手上げである。

「おお、若、何という事を」と恐縮しながらも興奮気味の少女の父に、宮澤賢治は手を差し伸べた。

「佐々木喜善さん?もしや遠野の民話を本にされていく。何と、このような所でご知遇を賜るとは光榮至極です。」

「何を仰る。かの驚異なる新しき詩集、童話集を世に問われた宮澤さんにお会いできるなど、やはり夢の中

に在るのかと疑います。」喜善の言葉はつつかえながら懸命に絞り出され、顔は泣きそうになつていく。そんな凄方だつたとは、と恥じ入る純三に、いや、確かに本は全く売れなかつたのです、と賢治も坊主頭を掻く。そして、説明が始

「芭蕉さんが仰るには、今私共が居るこの平原が、数百年後に仙臺が築かれる、その場所だという事です。」

純三、若、そして祝魚も互いに目を合わせ、怪訝な顔をする。数百年も昔の世界だといふのか、ここが。「奇態な話ですが、何としても皆が認識する必要がある。」

「何が起るのですか。」代わつて、喜善が答えた。「明後日以降、南から大軍勢が押し寄せてきて、この仙臺平野を埋め尽くします。その数、凡そ二十万人。」

純三、若、そして祝魚の目が大きく見開かれた。「な、何なのです、その大軍勢とは。」

賢治が引き継いで説く。「総大将は相模国鎌倉の右兵衛権佐頼朝。つまりここは私共の時代から凡そ七百年前、源頼朝が奥羽の支配者、平泉藤原氏を攻め滅ぼすまさに前夜なのです。」

そして今宵ここから遙か南西、厚樫山の要害で戦いが始まる。一同、窓の外に月光に照らされた草原に目を馳せると、闇の一点に火が灯り、あの怪僧が独り野

営する様が見えるのだった。翌朝、若が目覚めると、彼女の背骨の病を気遣つてか、男達は皆向かい席に座したままか、床に伏して寝入つていて、自分は一人座席に横たえられていた。

まだ陽が昇らぬうちに芭蕉が草原の向こうに現れ、沢山の木の束と、川魚の束を投げ出した。「朝メシです。勿論、全然足りません。では石を置きに行く班と、食糧調達班、そして車両に残る方々に分かれましょう。」

「芭蕉さん、小高く見える。あの丘は最後にしましょう。」

「あの丘は最後にしましょう。今、平泉の藤原泰衡公が陣を張つており、近づく事ができません。公がここを撤退し、大軍勢が押し寄せるまでのギリギリの刻が、狙い目です。」

「次回予告——仙臺の「礎石」を置いていく、喜善や賢治の行く手にあるものは?そして、泰衡つてどんな人?」

「何を置く、とはつまり」これを置く、とはつまり「仙臺は六つの高台に囲まれており、私共の時代にはここから北に東照宮、北西に青葉社、西に大崎八幡、南西に仙臺城、南に愛宕社、そして東に榎ヶ岡天満宮が建てられている場所になります。これらの地点を結びます。つまり私共は都市の礎石を置きに行くようなもので、お疑いですね。」

賢治が純三の顔色を見て、言った。確かに、とても科学的とは言えませんが、と純三は応える。「しかし急がねばなりません。明日中にこれらの石を六地点に置き終わらねば、大変な事に。」

「芭蕉さんは途方もない時空間の旅をされた由、私も詳細は存じません。確かなのは、私の持ったこの石どもを置かない限り、私共は昭和三年に帰る事ができないという事です。」

宮澤賢治が引継いで説く。「総大将は相模国鎌倉の右兵衛権佐頼朝。つまりここは私共の時代から凡そ七百年前、源頼朝が奥羽の支配者、平泉藤原氏を攻め滅ぼすまさに前夜なのです。」

そして今宵ここから遙か南西、厚樫山の要害で戦いが始まる。一同、窓の外に月光に照らされた草原に目を馳せると、闇の一点に火が灯り、あの怪僧が独り野

営する様が見えるのだった。翌朝、若が目覚めると、彼女の背骨の病を気遣つてか、男達は皆向かい席に座したままか、床に伏して寝入つていて、自分は一人座席に横たえられていた。

まだ陽が昇らぬうちに芭蕉が草原の向こうに現れ、沢山の木の束と、川魚の束を投げ出した。「朝メシです。勿論、全然足りません。では石を置きに行く班と、食糧調達班、そして車両に残る方々に分かれましょう。」

「次回予告——仙臺の「礎石」を置いていく、喜善や賢治の行く手にあるものは?そして、泰衡つてどんな人?」

「次回予告——仙臺の「礎石」を置いていく、喜善や賢治の行く手にあるものは?そして、泰衡つてどんな人?」



シリーズ 遠野の自然
「遠野の花々」①
遠野 1000 景より



カキツバタ



桜

五月、六月の遠野は花盛りの季節である。厳しい冬から開放されるように、多くの花々がいつせいに咲き乱れる。その種類も数え切れないくらい多い。しかも、初めて名前を聞くような珍しい花々もたくさんある。そのため、その季節の遠野の野原や林は、花だらけの植物園と化すのだ。

それにしても何という種類の多さであろう。かなり厳選したとしても、とても一度にご紹介できる数ではない。何回かに分割してご紹介することにしよう。

とりあえず今回は、植物図鑑で調べないと分からないような、遠野の花の上級編ともいべき花々ではなく、比較的名前をよく耳にする花々のご紹介から開始することにしよう。

まずは、カキツバタ。鮮やかな紫色。優美な花である。紫に白が混じるものもある。カキツバタの花びらの何ともいえぬ形とその美しさに言葉が出ない。自然の造形美と陳腐な言葉で片付けるわけにはいかない。

ついで、同じアヤメ科のシャガ。繊細な色と形、まことにおしゃれな花である。今年、遠野の桜は開花が遅く五月に入ってからだった。関東以南が早かったのに比べて大分遅れた。桜のほのかなピンク色、咲いてはすぐ散る散り際の潔さに昔から多くの歌が読まれてきた。まさに惜しまれつつ散っていく花の魅力にまい

つてしまう。

シャクヤクはよく立ち姿の美人に例えられる。写真の白のシャクヤクは、薄い花びらから光が透けて見えるが、何とも言えぬ高貴な色気を漂わせる。他方、ピンクのシャクヤクは若々しさを感ぜさせる。

一方で、野の花ともいべき花々。オオジシバリ、レンゲソウ、ハルジオン。何気なく咲く花であるが、じつと近くから見るとみなかわいい。栽培される花々と野の花に違いはない。人間の勝手な振り分けにすぎない。よくよく見れば野の花は繊細できれいだ。

◇ ミズバショウは尾瀬だけではない。ここ遠野でも見事に咲いている。

筆者は近年ようやく周囲の植物をゆつくりと観賞する余裕が出てきた。しかも、これまで視界に入ってきたなかで、花々の美しさに見とれてしまうことがたびたびある。若い時分にはなかったことである。

わき道にそれるが、人間に見える花の色と、昆虫に見える花の色は異なっているらしい。人間は花を観賞の対象として見ているが、昆虫にとっては花の蜜という食物が隠されている場所であり、花は人間よりずっと重要である。生物によって見え方が違うとは、まことに自然の妙で、奥深い。とはいえ、人間に見える色にはつくづく感謝したい。



ハルジオン



オオジシバリ



シャクヤク 白



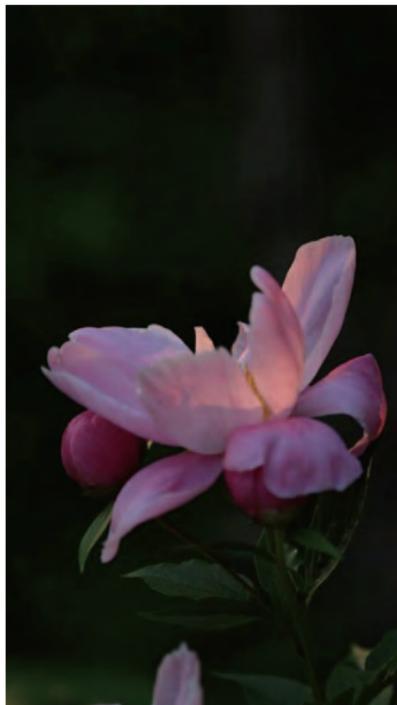
カキツバタ



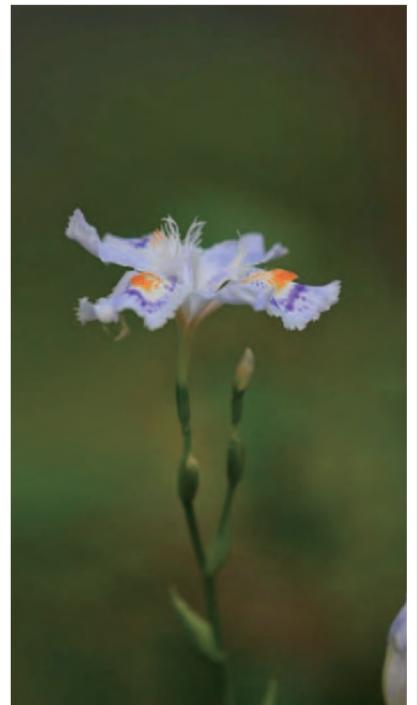
ミズバショウ



レンゲソウ



シャクヤク ピンク



シャガ

映画『本日ただいま誕生』で 取り上げられた先代住職 【法永寺】 (岐阜県大垣市静里町)

先代・小沢住職は、シベリヤ抑留、凍傷で両足切断などの数奇な体験に基づく法話が多くの人を惹きつけた
このご住職と今飯田氏、笑い仏作者の山本竜門氏の不思議なご縁から「笑い仏の福島への行脚」が始まった

笑い仏さん 福島への行脚 第九回

◆ 暑さも厳しさを増してきました。昨年六月に、福島県を目指し、「笑い仏」が鳥取県倉吉市を立寄ってから約一年が経ちました。その間、道中でいろいろな方のご支援をいただきました。現在は、岐阜県大垣市静里町の法永寺に逗留しています。

◆ このお寺は、現在、先代の奥様が住職を務められています。華奢で八〇歳を超えておられますが、実に弁舌達者。「きたない大垣弁ですみません」と、チャキチャキとお寺の掃除などをこなされています。わたしは言うのも失礼なのですが、実にお茶目な方です。

◆ このお寺を有名にしたのは、先代の小沢住職で、一九六八年に入られました。この方は、戦後のシベリア抑留の際の凍傷のため、両足切断という不幸を背負います。帰国後、義足をつけ、商売などを行いますが、いろいろ経験されて出家を決意。住職の数奇な経験から繰り出される法話は人々を引きつけ、傾きかけていたお寺が、現在のようになり復興したと言います。その生き様は『本日ただいま誕生』という映画でも取り上げられました。観光で人が訪れるお寺ではありませんが、今でも信者のみならず、さんが月に一度は集まり、座禅を組むなどして、研鑽

◆ しておられます。都会とは思えない静けさの中に、安らぎを与えてくれています。

◆ さて、今回のコラムは、このお寺をご紹介くださった今飯田さんのお話です。今飯田さんは、他界された先代住職と親しくされており、その縁でこのお寺に「笑い仏」を置きたいと奥様にお願いしてくれました。私もそのご縁は、「笑い仏」の作者である山本竜門さんとの交流にあります。

◆ 高校の先生をされていた今飯田さんは、棟方志功とともに版画界を支えた長谷川富三郎と知己を得ていました。長谷川さんが倉吉のご出身ということで、同地に住む「笑い仏」の作者である山本竜門さんを紹介してくれたと言います。三〇年ぐらい前のことでした。

◆ それからときが流れ、二〇一一年。東日本大震災が起こりました。心を痛めた山本竜門さんは「困っている方に、何とか仏像を送りたい」と思い立ちます。しかし、東北に縁故もない。「誰かいい人はいないか?」。頭に浮かんだのが、今飯田さんだったそうです。「教え子がいたけど、僕も東北に詳しいわけではなかったんですよ。でも気がついたら、竜門さんから、仏像がいっぱい送られてきて

ね」。三月一五日には、二つの大箱が届いていたそうです。当手を振り返って苦笑いです。

◆ 岩手県大船渡町に、教え子で歯科医をしていた方がいました。そこで、「おい、東北に仏像を送りたい」という方がいるんだが、お前でも何かならんか?」と、お願いしたそうです。恩師のたつての願いです。「是非送って下さい」と受け入れて下さったのです。ただ、教え子には「誰からももらったかは、言うなよ」と付け加えました。竜門さん自身が、善意で行った活動だったので、美談としてマスコミに取り上げてほしくなかったからだと言います。

◆ 仏像五〇体は、岩手県の歯医者さんの手から、東北の各地に届けられました。宮城県東松島町の仮設住宅にも届きました。中には「どうしてもお礼がしたい」という方がおられて、竜門さんに手紙をしたためた方もいるそうです。震災からしばらく経って、倉吉市にある竜門さんのアトリエ・集仏庵を訪れ、手を合わされた方もおられたそうです。

◆ 「頼まれたんで、できることをしちやろう」ということだけでですよ」と、今飯田さんは頭をかきながら、こともなげに言います。でもなかなかできることじゃない。この方は、普段から人

助けが身に付いているように感じます。操体法という医学的見地から確立された健康体操を習われ、それをこのお寺でも教えることに喜びを見いだしているとのこと。また、「びわ獲り名人」として近所では著名らしく、体にいいとされるびわ酒をつけ込んで、周囲に配っていると言います。そんな人だから、自然と人が集まるのでしょうね。改めて、親切というものは、気を張ってするものではないということをお伝えされました。

◆ 「竜門さんと話をしていたら、仏さんが福島を目指して旅してると言うから...」
写真は、今飯田さんが、「笑い仏」と笑っておられるお姿です。そんなこんなで、今度は我々MONKフオーラムが、今飯田さんと知己を得たわけです。少しずつ、多くの方の後押しを得て、よいしょ、よいしょと、「笑い仏」は福島を目指していきます。

◆ ◆ ◆
◆ そうそう、しばらく「笑い仏」は法永寺に逗留していますが、ご参拝の際は、事前に一度お寺にお電話をお入れて下さいね。

☎058・492・1561

右の写真は、
笑い仏さんと
笑っている
今飯田さん
(法永寺にて)

曹洞宗 法永寺

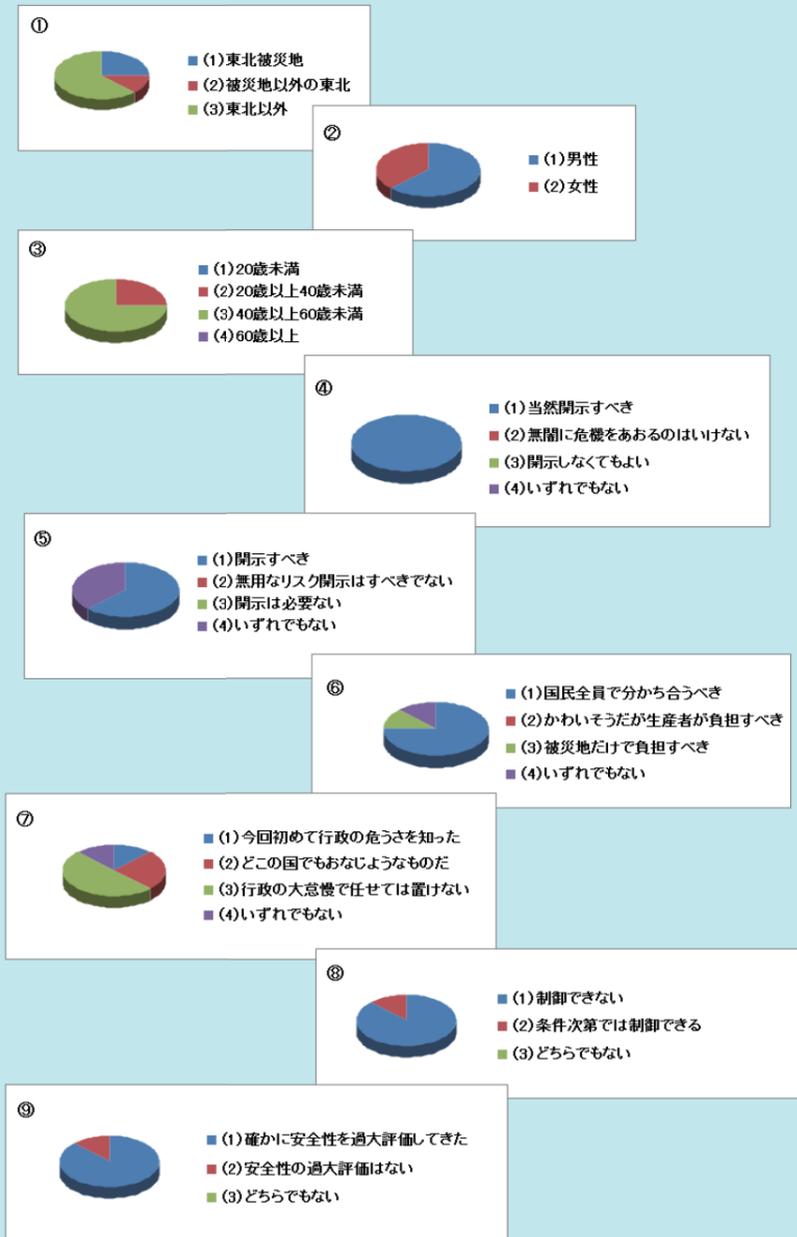
住所：
岐阜県大垣市
静里町437-1

電話：
058-492-1561



第13号 ネットアンケート集計結果 東北論(内田樹の研究室)について ②

No.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1)東北被災地	2
	(2)被災地以外の東北	1
	(3)東北以外	5
②	性別	
	(1)男性	5
	(2)女性	3
③	年齢	
	(1)20歳未満	0
	(2)20歳以上40歳未満	2
	(3)40歳以上60歳未満	6
	(4)60歳以上	0
④	被爆のリスク開示	
	(1)当然開示すべき	8
	(2)無闇に危機をあおるのはいけない	0
	(3)開示しなくてもよい	0
	(4)いずれでもない	0
⑤	リスク開示と農水産物の売行き	
	(1)開示すべき	5
	(2)無用なリスク開示はすべきでない	0
	(3)開示は必要ない	0
	(4)いずれでもない	3
⑥	被災地産の農水産物が売れなくなったら	
	(1)国民全員で分かち合うべき	6
	(2)かわいそうだが生産者が負担すべき	0
	(3)被災地だけで負担すべき	1
	(4)いずれでもない	1
⑦	行政の危機管理について	
	(1)今回初めて行政の危うさを知った	1
	(2)どこの国でもおなじようなものだ	2
	(3)行政の大意慢で任せては置けない	4
	(4)いずれでもない	1
⑧	原子力テクノロジーは制御できない?	
	(1)制御できない	7
	(2)条件次第では制御できる	1
	(3)どちらでもない	0
⑨	原発の安全性の過大評価について	
	(1)確かに安全性を過大評価してきた	7
	(2)安全性の過大評価はない	1
	(3)どちらでもない	0



今回の回答者数は八名となり、前回よりも増えました。テーマは前回に続いて『東北論』(内田樹の研究室)の主張について、その②でした。日本思想家、武道家、翻訳家、神戸女学院大学名誉教授・内田樹氏の東北の現状への発言に対するアンケートの第二弾でした。

今回は、特に原発問題に関して氏が鋭く切り込んだ発言について考えてみたいと項目を選定しました。

日本人がいまどんな被爆リスクにさらされているのか、リスク開示すべきとの点については100%が当然開示すべきと回答。被爆リスクを開示すれば被災地の農水産物は売れなくなる可能性があるが、それでも開示すべきが約63%。その場合、売れなくなった農水産物の経済損失はどうするかについては、国民全員が分かち合うべきとの回答が75%。行政の危機管理については意見が割れたが、50%が行政の大意慢で任せては置けないとした。廃棄物処理問題も含めて、原子力テクノロジーは人間には制御できないのではないのかとの質問には約88%が制御できないと回答。原発が出来てしまった以上、事故は起きないで欲しいとの願いが結局のところ原発の安全性の過大評価につながったとの発言に関しては約88%が確かに安全性を過大評価してきたと回答した。

編集後記

七月初めに思いがけず母校の同窓会らしき催しに参加した。正式な同窓会の案内状などを見ないと、かなりご年配の方ばかりで、とても参加は恐れ多いとこれまで遠慮してきたが、今回は非公式で肩肘張らない飲み会という触れ込みに惹かれ参加することにした。

じつにさまざまな年代のメンバー。筆者が最年長の少し驚いた。正式な同窓会ではこうはいくまい。またみなさまざまな職業に就いており、ユニークな出会いも多数あった。

しかし別の思いもよぎった。筆者の母校の高校は宮城県石巻市にある。そこは今般の東北大震災で最大の被害者を出したまちであり、それが動機となってこの新聞を創刊した経緯もある。

地元でも母校OBの復興への組織力・推進力が大いに期待されていたはず。しかし期待ほどではないという声も聞いた。期待が大きすぎるからではないかとも思った。実際はどうなのか、その会の参加者に聞いてみた。残念ながら、復興の話にはみな触れがらない。さまざまな事情があるのだろう。非常にさびしく感じられた。とはいえ地元の復興を望まない人間などいない。あらためて、この新聞や新聞を主体にした諸活動を多くの人に広めていこうと思った次第であった。

革物屋(かわもんや) WEB完全リニューアル (WEBを移動しました)

<http://www.birthday-press.com/> (バースデイプレス) → 「小物のカテゴリー」 → 「レザー」

<p>ミニバッグ Handy Second</p>  <p>持っていくくなる革バッグ。インナーバッグとしてもお使いいただけるセカンドバッグ。革は薄めの柔らかなものを使用し、手触り感を重視いたしました。内側は耐久性のある光沢ナイロン製布を使用。</p>	<p>ミニバッグ Tiny Dice</p>  <p>用途ご自由の四角いケース。重量40gと比較的軽量の製品ですので、携帯ストラップ用としてお使いいただくもよし、大きなバッグに吊り下げていただくもよし。また、中に贈り物をつめてプレゼントケースとしてのご利用も一考かと。使い方は工夫次第。</p>	<p>ミニバッグ Tiny Log</p>  <p>用途ご自由のまるいケース。重量40gと比較的軽量の製品ですので、携帯ストラップ用としてお使いいただくもよし、大きなバッグに吊り下げていただくもよし。また、中に贈り物をつめてプレゼントケースとしてのご利用も一考かと。使い方は工夫次第。</p>
<p>モバイルバッグ Beans L</p>  <p>レザーでオールマイティ、両方のご満足。これまで、オールレザーでお手頃価格のモバイル端末用バッグは多くありませんでした。また、各モバイル端末専用バッグはありましたが、どの端末でも収納可能なオールマイティバッグも多くはなかったようです。Beans Lは、その両方でご満足いただけるバッグです。</p>	<p>モバイルバッグ Beans S</p>  <p>レザーでオールマイティ、両方のご満足。これまで、オールレザーでお手頃価格のモバイル端末用バッグは多くありませんでした。また、各モバイル端末専用バッグはありましたが、どの端末でも収納可能なオールマイティバッグも多くはなかったようです。Beans Sは、その両方でご満足いただけるバッグです。</p>	<p>モバイルバッグ Handy Pouch</p>  <p>あなたにお供するポーチ。持ち運び可能で、デスクやテーブルに置いて開け閉めできるポーチ。上下蓋部分の内側にスポンジを挟み込んでおりますので、モバイル端末機器の付属品の収納にもお使いいただけます。</p>